2DB
二次元ドリーム文庫
Melonbooks 購入特典外伝小説
Comic.Dojin&Goods total shop
百合ラブスレイブ
YURI LOVE SLAVE
わたしだけの委員長外伝
【小説】あらおし悠
story by araoshi yuu
【イラスト】鈴音れな
illustration by suzunone rena

「あん、んふ……ふ、ちゅっ……」
誰もいない放課後の教室で、甘い吐息だけが小さく響く。真桜は教室の壁に怜那を押しつけ、その唇を啄んでいた。軽く触れ合うだけのキスでも、背中がゾクゾクするほど気持ちいい。
ただ、怜那の方は、異様なまでに冷静さを欠いていた。
「真桜……。もう、これ以上は……」
「今日は、あたしの言うことなんでも聞いてくれるんでしょ。怜那ってば委員長のくせに約束破るの？」
「そんなつもりじゃ……。でも、教室だと誰か来るかもしれないし……」
凍えたように唇を震わせ、彼女は、しきりに扉の向こうを気にしていた。
もう部活も佳境の時間帯だし、クラスメイトが戻ってくる可能性は低い。さっきから廊下を歩く人の気配すらない。それでも気が気でないみたいだ。
ここ数日、怜那が委員長の仕事で忙しくて、まったく触れ合うことができなかった。お詫びになんでも命令を聞いてあげると言い出したのも、彼女の方。だから真桜は、一秒でも早くキスしたかっただけなのに。
「ねえ、やっぱり場所を移さない？」
気持ちは分かるけど、さらにお預けを食わされる方が我慢ならない。
「鍵も閉めたし、大丈夫だって言ってるのに。委員長は真面目だなぁ」
「委員長とか関係ないわ。そういうことじゃなくて……あンッ！」
真桜の指に内腿を撫でられ、怜那が可愛い悲鳴を上げる。さらに爪の先でくすぐると、汗が滲んで、肌がしっとりと湿り気を帯びる。
「あは……怜那ったら濡れてきた」
「へ、変な言い方しないで！」
首筋に顔を埋めて囁くと、怜那の声が裏返った。そんな反応をされたら、真桜じゃなくてもピンとくる。
「ははーん。怜那、キスだけでこっちも濡れちゃったんでしょ？」
下着の線に沿って鼠径部を撫でる。彼女の身体の中心に向かって、指先をジリジリ進める。秘密を暴露されそうになって、いつもは無表情な怜那の顔に、あからさまな焦りが浮かぶ。
「ち、違……！ そんなこと……」
「ホントー？ じゃ、違うっていうなら確かめてもいいよね」
「馬鹿、そういう問題じゃ……あ！」
怜那が白い喉を見せて仰け反る。同時に、彼女の下着に潜り込んだ真桜の指が、熱いぬかるみに沈んだ。力を入れるまでもなく、淫裂の方から吸いついてくる。その感触と粘液の熱さに、真桜は思わず感嘆の声を上げた。
「うわ……すっごい。ホント、怜那ってエッチだよね」
「ぜ、全部真桜のせいじゃない！ あなたがこんな風に……ヒッ⁉ ゆ、指……動かさないでぇっ」
ひどい言いがかりだ。エッチの仕方を教えてくれたのは怜那の方なのに。
「んー。でもまぁ、確かにあたしがお願いしたから、間違いじゃないかな」
「お願いなんて可愛いものじゃなかったでしょ！ だから動かしちゃ駄目って……あん……あんっ！」
彼女の苦情を聞き流し、愛液を絡めた指で淫核を撫で上げる。彼女の脚は震え、真桜の背中に回された両手も、必死になってしがみついてくる。
「や、あ……あっ！ そこ、そんなにしたら……あぅ、ふぁあぅ!!」
しかし、さすがに声が大きくなってきた。口を塞ぐつもりで唇を差し出すと、怜那の方から吸いついてきた。
「あ、あふ、真桜……ん、ちゅ……ちゅぱ、ちゅる、ちゅ、じゅるっ！」
最初の人目を憚る密やかさなんて完全に忘れ、卑猥な水音を立てて唾液を貪る。あまりに強烈に吸引されて、真桜の方が目眩を起こしそうになる。
しかし、舌が触れ合う気持ちよさを一瞬たりとも逃したくなくて、必死に意識を繋ぎとめた。
「あん、怜那ってば……ふぁ、あん、ちゅ……ちゅるちゅる、じゅるっ」
「真……桜……ん、ふみゅゥッ」
ぬるぬると、二枚の舌が踊るように絡み合う。互いの口腔に唾液を送り、溢れた分が唇の端から零れ落ちる。それを舐め合い、掻き集め、再び相手の口に流し込む。キスと淫核を同時に責められ、怜那が鋭く悲鳴を上げる。
「あ、真桜……真桜っ！」
硬直肉芽を弾いた瞬間、彼女の身体が爪先立ちで身を震わせた。わなわなと痙攣し、そして力尽きたようにズルズルと、真桜の身体を滑り落ちる。
「は……あ……あ、あぁぁぁ……」
怜那は床に手を突いて、肩で激しく喘いだ。時々、咳き込むように呼吸が乱れる。絶頂痙攣のせいだと分かっていても、ちょっとだけ心配になって、彼女の髪を撫でた。
「はぁ……」
すると、それに反応して、怜那がゆっくりと顔を上げた。
「――！」
その眼が、とろりと潤んだ彼女の瞳が、鼓動を一気に跳ね上げさせた。絶頂したのに欲情の色は少しも消えず、むしろますます濃くなって、物欲しそうに真桜を見上げる。
音を立てて唾を飲み込んだ。脚から力が抜けて、今度は自分が窓を背にして寄りかかる。
「怜那……舐めて……」
そして、震える手でスカートをたくし上げた。さっきは怜那をからかったけど、真桜のそこだって、キスの快感でとっくにぐっしょり。早く刺激が欲

しくてウズウズしている。
「はぁ……」
返事の代わりに、怜那が吐息を漏らす。彼女の眼が、露わになった淡いピンクのパンツを凝視する。下着を見られていることも、そこを濡らしているのを知られることも、全身が竦み上がるほど恥ずかしい。けれど、それ以上に、彼女の舌が欲しかった。
「怜那……」
眼で催促する。彼女も真桜の瞳を見詰めながら、太腿に手をかける。伸ばした舌を下着の底に近づける。
やっと自分も気持ちよくなれる――そう胸を高鳴らせた瞬間。
ガタガタッと、教室の扉が鳴った。ハッとしてふたり同時に振り返る。
――あれ、もう鍵閉まってる。
擦りガラスの向こうに二人分のシルエット。クラスメイトの誰かが忘れ物でも取りに来たらしい。
――もういいでしょ、明日にしよ。
女の子たちの声と足音が遠ざかる。
真桜と怜那は、それが完全に消えるまで、身動きできないでいた。スカートをめくり、下着に顔を寄せた、見られたらただではすまない格好のままで。
人の気配がなくなると、怜那は安堵するどころか鋭い視線を向けてきた。
「だから誰か来るって言ったのに」
「ご、ごめん。で……でもさ、大丈夫だったでしょ、ね?」
恋人に叱られ、必死に取り繕う。すると今度は、彼女の眼が、少し悲しげな色に沈んだ。
「私は、こんな場面を見られることに怒ってるんじゃないの。……もし、私たちの関係が知られたら、別れなくちゃいけなくなるかもしれないわ」
「え……?」
驚いた。彼女が、そんな心配をしているなんて。あまりいい始まり方をしたふたりじゃないので、そこまで真桜を想ってくれることが、今でも時々、意外に感じてしまうことがある。
「お別れになってもいいの?」
「やだ!」
首を傾げて尋ねる怜那に即答する。ワガママすぎたことを反省し、許しを請う。言われた通り場所を移そう。なんなら、今日は我慢してもいい。
すると彼女はにっこり微笑み、改めて下着に唇を近づけた。
「え……いいの?」
戸惑う真桜をからかうように、委員長の唇が意地悪い笑みになる。
「だって、もう大丈夫なんでしょ」
「れ、怜那……あぁぁン!」
そして下着をずらし、淫裂に口づけた。奴隷のくせにご主人様を翻弄してと悔しくなるけど、彼女の激しい舌使いに、真桜の思考は、一瞬で甘い快感色に染め上げられた。

二次元ドリーム文庫371『百合ラブスレイブ　わたしだけの委員長』外伝オリジナル・ショートストーリー